


# 博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 富盛伸夫 

本学大学院地域文化研究科博士課程吉田一彦氏の提出した博士学位請求論文『いわゆる「ガ格」標示に関する研究』は、現代日本語研究の中心的な課題の一つである「格助詞」と一般に呼ばれている助詞群のなかでもとりわけ解釈困難とされる形態素 /ga/ の研究に正面から取り組んだ精緻な論考で、西欧の言語思想を背景に発展した近代言語学の枠組みの呪縛から日本語研究を少しでも解き放とうとする志向性をもつものといえる。すでに膨大な先行研究の歴史があり、かつ、現在でも絶えず研究者の関心を強く惹いてやまぬこの主題に立ち向かう彼の研究姿勢は、視座を人間言語のコミュニケーション機能という根幹に常に還元しつつ、日本語を研究対象としながらもこれを決して特別の言語と捉えない、世界の言語に内在する言語一般の機能的構造を解明する方向に展望を開くものであろう。審査委員である井上史雄、早津恵美子、高垣敏博、峰岸真琴、富盛伸夫（主査）は、提出された本論文を査読し、さらに平成14年3月6日に行われた最終試験（口頭試問）を経て、以下のように総括し、報告する。

## 論文の構成および概要

本論文は全6章、A4版（30行）の本文229ページ、参考文献を含め240ページからなるもので、以下に論文の概要と特記すべき論点について順を追って記述する。

第1章「問題の所在と本研究の意義」では、初めに国内や海外（パキスタン、タイなど）で日本語教師としての経験と直観を持つ氏が本テーマをとりあげるに至った研究の動機と対象・目的が述べられたあとで、第一に、「が」が1個の言語形式として存在し、先行研究の多くの分析でなされているような多義性（主体「ドアが開く」/ 対象「花が好き」）を持たず、かつ、ほかの言語形式と同義的でないという仮定を立てる。本研究は、従来「いわゆる」格関係の標示としてきた文法的あるいは統語的機能を優先するこれまでの研究に批判的立場をとり、その意味・機能を記述する作業でまず試みられるべき、「が」を含む機能語に関する固有の特性ないしは単一の機能の記述をめざしたものである。ここではその議論に厳密性を与えるために、部分的に記号論理的な手法を採用して論述を進め、現代日本語ではきわめて多い「が」のいっさい用いられない文を「省略」現象であるとするような致命的な欠陥を持つ説明原理を否定する。この論証のためにソシュールの原資料から読みとれる言説にあたり、心的実体をも研究対象とする立場をとる一方で、ヤーコブソンの記号理論を批判している。

続く第2章「先行研究の検討と問題点の指摘」では、約50ページを割いて「が」のみならず、主語・主格・主題に関わる先行研究を批判的に再検討し、研究方法論上の問題点を指摘した。その中で、

とりわけ山田孝雄と松下大三郎の研究において「格」概念を文中における内容語間の相互関係を抽出し類型化するために用い述語成分との間に aboutness の関係のみようとしていることなどに注目しているが、文構成成分間の文法的機能を、統語的観点から、そしてさらに、吉田の主張である語用論的な観点からおこなう必然性を認めようとする。

第3章「「が」の文法的特性」においては、統語的な出現環境についての実証的な検証をする。従来の研究では、用言（相当のもの）、あるいは名詞句（相当のもの）であることが「が」出現の自明の条件だとされてきたが、豊富なコーパスによる個別ケースの検討から、統語的な制約が予想外に少ないこと、むしろ、＜談話内に話し手が表し出す事物が同定されるために十分だと話し手自身が判断する情報を伝達する可能性を持つこと＞という伝達情報の特徴が条件が機能している、という観察の一般化を主張している。さらに、形態素「が」が文の必須要素であることが固有の特性であるとする多くの先行研究に対して、その矛盾を明らかにするとともに、＜動きや状態の主体＞も＜状態の対象＞も表さない用法（例「福引きって、最後の日が当たるんだよね」）が自然文に相当頻度で存在することから、文内部の要素間に成立する関係を一般化することを試みる。その上で、この言語形式が単に文の文法レベルの現象としてだけ捉えるのでは不十分であり、それと、文以上の談話的・テクスト的レベルでの語用論的現象との相互関係として記述すべきだという主張をする。

第4章「「が」の語用論的特性」では、その論理的展開として、実際の例文にあたりつつ、前章の結論を新たな視点から再構成し、本研究の最終目標である「が」の意味・機能に関する一般化を、形式に固有の文法的特性と、そのような文法的特性の発現を要請する語用論的動機という、2つのレベルの異なる規則性の組み合わせとして提示する。吉田氏の本研究の核心はこの4章で80ページ近くにわたって電子コーパスも駆使した多量のデータから抽出された、談話的・テクスト的レベルでの情報伝達機構の解明にあるといえよう。すでに先行研究批判で明示したように、言語形式に観察される形式的特徴を第一に基準としたアプローチが必ずしも現象の一般化に成功していないこと、文の要素が担う情報伝達機能・価値こそが一般化に有用な概念であるという前提から、文の心的構成についての考察を深める。前述した山田孝雄の「統覚作用」論と、松下大三郎の「判断」論とをつぶさに再検討し、その比較と対照から、吉田からみて両者の優れている知見をとりだした。それを元に吉田論文独自の枠組みである、現代日本語文の心的構成、そしてそれと実際に用いられる文の各要素との対応関係を理論化する意図から慎重に論じている。ここでの中心的概念として設定されたのは、述べ伝えるの標的という心的実在である TARGET であり、「が」の前に置かれる言語形式が担う情報的価値として抽出したものに対応している。そして、その TARGET との相関関係において述べ伝えられる観念を CONTENT と名付け、文の情報伝達構造を再編成した。最後に、実際の文例から、TARGET が文中に明示される場合と、明示されない場合との条件設定について、テクスト的・談話的に必然性を検証した。

第5章「先行研究において「が」の機能と論じられた現象に関する代案」において、＜動きや状態の主体＞を表す、ということと、＜状態の対象＞を表すということが「が」の主な機能であるとする説に対しては、それらが固有の機能として表示するものではないとして、別の説明原理を提示した。

すなわち、参加者によって任意の事物が TARGET として認識されているならば、その事物は<動きや状態の主体>としても認識されるのだろう、ということと、<動きや状態の主体>がすでに決定しているか、または、問題視されていないため、それを同定することが文脈において要求されておらず、かつ、文の述語の指示対象である、動きや状態とともに同一の事象を構成する1個の事物を指示対象とする言語形式が存在する場合に、その事物が述語の意味との相関によって<状態の対象>として認識される、ということである。これは「が」の使用・不使用という形式的特徴に関与せずに行われる、とする。

第6章「結論」では、本研究全体を概観した上で、問題点を認識しながらも将来に残された課題として、数点を挙げている。関連分野（言語心理学、認知心理学、哲学など）からの知見を取り込み、あるいは関連づけて、言語形式自体の問題ではない TARGET の認識を考察する必要性、「が」という形式の多重的使用の問題と伝達される情報認識に関する階層性の問題との関係、「気が狂う」などの慣用句的表現の分析、言語教育など実目的への適用、など、が研究上の展望として指摘されている。

#### 本論文に対する評価

上記審査委員会は、吉田一彦氏から提出された本論文を個々の専門分野からの視点も加えて評価したが、最終試験の質疑応答を経て、以下のような諸点にまとめられる。

- (1) 吉田論文の研究対象と到達目標が明確に把握されており、それが論文のなかに明示されていること。吉田一彦氏の観察は単に日本語一言語の研究分野にとどまらない、一般言語学的に大きな問題に波及する可能性を持つ。いわゆる「が」格の言語形式をとらないゼロ記号の文をも潔く一つの言語形式として研究対象に取り上げるアプローチは、アジア諸語や中国語など、「主格」形態素をもたない言語の分析にとっても広く類型論的な観点から、新たな研究方法として適用できるかもしれない。ここでは、20世紀の構造主義言語学が表出された言語形式の分析に精密化された方法を開発してきたことの功罪が意識され、それを補完する新たなアプローチが試みられている。吉田が援用するように、ソシュールの原資料には記号の第一原理としてゼロ記号の概念を含む心的実体を設定することの重要性とともに、言語構造の線状性の重要性が読みとれるが、後者はその後の構造主義言語学では十分に考慮されなかった。吉田論文に提案されている、日本語学における「格」現象研究を徹底批判する中で、その線状性から演繹される情報伝達構造の作動メカニズムを TARGET と CONTENT という2分された構成要素の相互作用の中に求めている発想は、そのまま現代言語学の現状を批判し再構築しようとする力量を示していると判断される。
- (2) 吉田論文で提示する言語研究のベクトルは方法論上、概念規定の厳密化に向かい、論理的な実証プロセスを経て、新たな枠組みの提案へと到達する。その過程で厳密化を図る配慮から若干、論旨が読み取りづらい、表現が長いなどの批判があったものの、単に用法の分類の細分化に甘んじるのではなく、あえて、言語的伝達システムの一般化の方向へと

踏み出す勇氣は高く評価できる。そこで主張されている「が」の前に置かれる言語形式に関する条件の一般化に向けて、名詞や代名詞といった統語的・形式的特徴ではなく、談話内に話し手が表し出す事物が同定されるために十分だと判断する情報の伝達に機能する語用論的装置であるとする立場は、言語形式の分析に限定しようとする従来の記述言語学からすると言語外的な事実を重視しすぎている批判はあろうが、より説得的な統合的な解釈を可能にしているといえるであろう。

- (3) 吉田論文は、このテーマに関わる主な言語理論の主張を綿密に検討した上で、膨大な先行研究を渉猟し精査して、この研究テーマの先端的な問題性を把握している。機能言語学的観点から新旧の情報構造の表示形式であるという説だけでは解決できない例を示すなど、先行研究の多くにみられる矛盾・誤謬あるいは理論上の非合理性を指摘するが、それらをただ批判するのではなく、山田、松下などの卓見を柔軟にかみ砕き自説のなかに生かし切っていることも吉田の咀嚼力を十二分に示している。また、研究目標へと収斂する統合的な構成、章立て、注記や参考文献の表記など博士論文の形式上に不備のないことも確認された。しかしながら、電子コーパスを含む資料体の作成とその取り扱いについては十分な量と質が備えられていることなどは高く評価されたが、社会言語学的な見地から通時的な言語変異・方言差・個人差などへの配慮が不足していた点は指摘された。
- (4) 吉田論文の提起する問題は、形態素「が」をめぐる言語現象の、より合理的な説明原理の探求から発し、将来的には類型論的あるいは対照言語学的な有用性が認められることが複数の委員から強調された。さらに、吉田自身の研究範囲を逸脱するが、文構造の合理的な解釈の提出にとどまらず、逆に、文産出プロセスでのメカニズムの解明へと、あるいは、様々な工夫を考案したインフォーマントの直観テストなどの評価を取り込めば、より、吉田論文の主張に説得性が増すことが助言された。また、「が」と共起する動詞の特性、名詞（句）の特性などへの検討も今後の課題として提出された。

#### 総合的評価

審査委員会の結論としては、提出論文において、吉田一彦氏の言語研究への先鋭な学問的姿勢とともに言語研究者としての資質・洞察力・分析力などが確実に示されていること、また、最終試験では、個々の質疑応答において氏の明確な問題把握力と学問的水準を確認できたことから、審査に関わった委員一同満場一致で、吉田一彦氏が博士学位（言語学）授与に十分値するものと判断した次第である。